

2024年1月14日

聖書箇所 ローマ 12章 10-13節

メッセージ題 キリスト者の召しと働き

詩篇交読 147篇

キリスト者の召しと働きと題して、みことばを学んでいきたいと思えます。
私たちが事を行う時に常に持っていなければならないことは、天を思っている
ことであり、神の栄光のためであるかという事です。

コロサイ 3:1-2「**こういうわけで、あなたがたはキリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。上にあるものを思いなさい。地にあるものを思ってはなりません。**」

すなわち、自分の目的の成就ではなく、天のためのことが第一となることです。
そして、それは恵みによらなければできません。
そして、パウロはⅡコリント 4:18 では、「**私たちは見えるものではなく、見えないものに目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからです。**」

私たちは見えるものに、目を奪われ、心を留めてしまい、神の栄光に関わる正しいことではなく、この世のことに思いを奪われ、右往左往してしまい、信仰による歩みに支障をきたします。神につながり、神とともに歩むというみこころを行うことができず、キリストの愛による御国の実現と広がりが阻まれてしまします。では、神様の召しと私たちがなすべき働きとは何でしょうか？

パウロは、ローマ 12:10-13 で、

「**兄弟愛をもって互いに愛し合い、互いに相手をすぐれた者として尊敬し合いなさい。**」

「**勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。**」

「**望みを抱いて喜び、苦難に耐え、ひたすら祈りなさい。**」

「**聖徒たちの必要をともに満たし、努めて人をもてなしなさい。**」と言いました。

とても大切に重要な教えであり、命令とも言えます。この中で、今日は特に「**勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。**」に注目して学んでいきたいと思えます。

- ① 神が与えられた働きの意味
- ② カインとアベルの違い
- ③ 私たちの仕事
- ④ 神のために労苦する
- ⑤ 神の民の働き
- ⑥ パウロの召しと私たちの召し

① 神が与えられた働きの意味

神様は、創世記 1 章を見ると、27 節で「神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。」とあります。そして、31 節には、「神はご自分が造ったすべてのものを見られた。見よ、それは非常に良かった。」神様は、造ったすべてを見て、非常に良かったと言われています。神様は、何も無いところからすべてを創造されました。

人はご自身のかたち、そして神のかたちに創造されたとあります。神のかたちとは何でしょうか？創世記で現わされている神は複数とみることができ、それは父・子・聖霊です。そしてそれは、永遠の愛の交わりであり、人はそのかたちに造られ、それは、土地のちりて形作られ、その鼻にいのちの息を吹き込まれました。神様と関わりのある存在とされ、他の被造物と全く違うものとされました。また、神様は 2:18 で「人がひとりであるのは良くない。わたしは人のために、ふさわしい助け手を造ろう。」と言ひ、助け手が与えられました。

神様は、人をエデンの園に連れて来て、置かれ、耕させ、守らせました。ここで、主は、働きへと人を導いておられます。しかし、それは苦痛を伴う労働という意味合いのものではなく、耕すということで、耕すの本来の意味は、喜びを伴う務めであり、主御自身との親密な深い交わりがあり、その関わりが祝福されたものがあります。

ダビデが、詩篇 23 篇で主との関係で主を羊飼いと言ひ、乏しいことがなく、緑の牧場に伏させて、いこいのみぎわに伴われると言ひましたが、そのような安息を見いだされる祝福された関係があったと思われます。

また、守るともありますが、神様は人に責任を持たせました。ここで、神様と人が絶対的な信頼関係の中で、生きることが最も大切なことであることを見いだすことができます。エデンの園を管理するという意味合いもあります。主はそこに食べてよい木と食べてはいけない木を置かれました。それは、善悪の区別を教えるものでもありました。私たちが事を行う時にも、良いこと悪いことの判断を

して、選び、決断します。主の声に聞き従うことが大切であると言えます。

召しと働きの、根底にある、最も大切な動機のある中心にあることは、とてもシンプルなことであり、それは、神様が召されたところで神様を喜び、神様に聞き、神様に全き信頼を寄せることであると言えます。

② カインとアベルの違い

カインのしたこと、アベルのしたことから、神様に従ううえで、また、仕えていく上で何が大切なのかを見いだすことができます。

神様はアベルのささげものに目を留められました。なぜでしょうか。

創世記4章4節で「主はアベルとそのささげ物に目を留められた。」目を留められたとあり、神様が目を留められることは、良いことで正しいことです。

そして、ヘブル11:4では、「**信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神に献げ、そのいけにえによって、彼が正しい人であることが証しされました。神が、彼のささげ物を良いささげ物だと証ししてくださったからです。彼は死にましたが、その信仰によって今もなお語っています。**」とあり、アベルは信仰によって、正しいと、ささげ物が良いささげ物だと証しされていると聖書は言っています。

神様は、アベルの信仰を良しとされました。アベルの信仰の根底にあるのは、神のみこころを行うということが流れていて、そのことに日夜思いを馳せていたのではないのでしょうか。私たちが神に選ばれ呼ばれ、みこころにかなった働きをする心の状態とは、神様への飽くなき思いであって、熱烈な愛です。アベルの信仰から出たささげ物は、彼を義人として証しされました。

確かに彼のささげ物は、「**自分の羊の初子の中から、肥えたもの**」でした。このささげ物は、神の目にかなったものであり、目を留められたの言語の意味は、神様が驚きをもって目を留めたというものです。先ほども言ったように、私たちは見えるものではなく、見えないものに目を留めます。アベルは後に神様がされようとしたことを、信仰によって行いました。これは後にレビ記において、モーセにささげものをしなさい、というところの最初に全焼のいけにえである羊を献げることで見いだすことができます。また、イエス様ご自身が神の子羊とされ、御自身を献げられました。そして、初子であることも注目に値します。初子とは、神の所有のものだからです。

このようにアベルは、正しいことを行いました。では、カインはどうだったでし

ようか。ヘブル 11:4 から見ていくと、カインのいけにえは、「**信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神に献げ**」とあるようにアベルより劣っているものであることがわかります。いけにえも大切ですが、それとともに、主は正しいことをしているかどうか注目しています。カインが主の御前にみこころに適った正しいことにしているかどうか目を向けていらっしゃいました。

新改訳 2017 では、「**良いことをしているのなら、受け入れられる。**」良いことと言っていますが、第 3 版や協会共同訳では、正しいことと訳しています。

イエス様は、マタイ 3:15 で「**イエスは答えられた。「今はそうさせてほしい。このようにして正しいことをすべて実現することが、わたしたちにはふさわしいのです。」**」と言われました。

私たちの心はどうでしょうか。私たちの働きのすべては、正しいことに向けられているでしょうか。そのことができるようになりたいと求めているでしょうか。私たちの働きの原点はここになければならないし、カインのように、正しいことに関わりを持たずに悪に関与してはいけません。そのことが、妬みとなり、人類最初の殺人を犯してしまいます。私たちは神のご計画全体を知り、恵みの福音と御国の福音とを深く理解することが大切です。

③ 私たちの働き

神様の恵みによって、罪の赦しがあり、贖いにより、失っていたものを回復し、完全に取り戻せることになりました。

仕事を通して神と人に仕える、という本の中に次のように記されています。

「**私たちは、神の恵みによってのみ救われているのだから、親として、芸術家として、ビジネスマンとして、ノンクリスチャンの人々よりも特別に優れているわけではない**ということを理解しています。福音の訓練を受けた私たちの目には、神に造られ、召し出された人間たちが、搾乳などの簡単な仕事から芸術的あるいは歴史的な偉業まで、すべての人を通じて行われる神のみわざによって光り輝く **この世界が映っているのです。**」

私たちは、様々な仕事に就いています。私が仕事で会う方たちはほとんどがノンクリスチャンです。会って少しすると私はイエス・キリストを信じるクリスチャンですといいます。暗い世の中に福音の光が見いだされるべく、キリスト者の行動や言動は、彼らに届くことを期待し、善を行い続けることが大切です。私たち

は積極的に彼らに働きかけて、キリストの素晴らしさを知ってもらいたいと思うのです。

ですから、仕事への取り組みも、誠実で愛のあるものに留まることが大切なのですが、それには、主の素晴らしさに思いを馳せ、ダビデのように、信仰によって、得られるものがどれほど素晴らしいかを、知ることが大切です。神様の召しがどれほどのものかを見る時に圧倒されます。神様の御名は詩篇 8:1「**全地にわたりなんと力に満ちていることでしょう。**」そして、5 節では「**あなたは人を御使いよりわずかに欠けがあるものとしこれに栄光と誉れの冠をかぶらせてくださいました。**」ダビデは信仰によって神の力が全治に及んでいることを見ました。また主は、詩編 147:14 で「**主はあなたの地境に平和を置き 最良の小麦であなたを満たされる。**」主は、何もかも支配し、すべてを生かすお方です。このビジョンを持ちながら、では、私たちは実際にどのように働きに臨むかを考えましょう。

④ 神のために労苦する

神と人に仕えることを念頭に置いていないと、自分のことでいっぱいになってしまいます。伝道者の書では、このことから、日の下で行われることは、空しいと言っています。伝道者の書 2:22 では「**実に、日の下で骨折った一切の労苦と思い煩いは、人にとって何なのだろう。**」と、日の下には、益になることは一つもない、と言っています。しかし、主に仕えること、神の栄光になることに思いを馳せて事を行うことは、益になります。キリスト者の歩みは、実際労苦が伴います。労苦が多いのです。しかし、その労苦は喜びである、期待感に満ちたものです。パウロがあらゆる危機と苦難を通り、良い行いに自分を献げて、勧めをして、使徒 20:35 では、「**このように労苦して、弱い者を助けなければならないこと、また、主イエスご自身が『受けるよりも与えるほうが幸いである』と言われたみことばを、覚えているべきだということを、私はあらゆることを通してあなたがたに示してきたのです。**」とイエスに倣ってパウロは自分もやってきたことを指し示し、神の恵みの福音を証しする任務を全うできるなら、いのちは惜しくないと言ったのです。

福音に生きる時に必ず反対者に会い、また、私たちは憎まれます。(ヨハネ 15:18) I コリント 15:58 では、「**ですから、私の愛する兄弟たち。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは、自分たちの労苦が主にあって無駄でないことを知っているのですから。**」

樂をしたいという思いは働きます。しかし、それではいけません。あなたの視点はどこに向けられているのでしょうか。主イエス様でしょうか。日の下である世でしょうか、自分自身の欲の達成でしょうか。神のご計画の全体を知って、そのみこころを行うことにすべてを献げているのでしょうか。イエス様のために日夜目を覚まして、御力を求めているのでしょうか。

マタイ 5:11-12 で「**わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。大いに喜びなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々は同じように迫害したのです。**」私たちが主のために働いたことの報いは大きいのです。私たちの働きとは何でしょう。私たちの労苦とは何でしょう。私たちは神の国の大使ともいえるでしょう。本来の住まいは天です。しかし、今は地上に遣わされています。そして、和解の務めをゆだねられました。そうすると仕事は副業、教会は本業ともいえると思います。ですから、教会との関わりに、もっともっと熱心に取り組んで欲しいと思います。そして、主はどんなことでも、報いを用意しておられます。だからこそ、労苦することが必要だし、その力も主が与えてくださいます。恵みの現れである賜物をいただけます。だからそれを求めましょう。そして、それはみこころを行うために用います。主イエスのために命を捨てる、この犠牲のために生きる。命を使い果たす、これがクリスチャンの使命です。イエスが私のために命を使い果たしました。この使命感を持って歩いていきましょう。

⑤ 神の民の働き

それは、いつも主のわざに励むことであり、その一つであり、最も重要なものは礼拝です。詩篇 100 篇 2-4 で「**喜びをもって主に仕えよ。喜び歌いつつ御前に来たれ。知れ。主こそ神。主が私たちが造られた。私たちは主のもの主の民その牧場の羊。感謝しつつ主の門に賛美しつつその大庭に入れ。主に感謝し御名をほめたたえよ。**」主に仕えよ、賛美せよ、ほめたたえよとあります。このように主は礼拝に行くことと、ともにこうせよと命じておられます。

I ペテロ 2:5 では、「**あなたがた自身も生ける石として霊の家に築き上げられ、神に喜ばれる霊のいけにえをイエス・キリストを通して献げる、聖なる祭司となります。**」霊のいけにえをささげるのです。その他の働きも大切ですが、礼拝が最も大切です。

⑥ パウロの召しと私たちの召し

パウロは福音を伝えるために恵みをもって召されました。ガラ 1:15-16 で「しかし、母の胎にあるときから私を選び出し、恵みをもって召してくださった神が、異邦人の間に御子の福音を伝えるため、御子を私のうちに啓示することを良しとされたとき、私は血肉に相談することをせず、」

御子を私のうちに啓示することを良しとされたとあります。ユダヤ教に熱心であったパウロがこの福音に携わるには、よほどのことがなければ、この大転換を受け入れることは出来なかったでしょう。事実彼は、天からの光に照らされた後、奇跡的な大改心へと導かれたのです。それは神の光であり、闇の中に輝く希望の光であったでしょう。パウロがこの時にイエス様の声を聞き、パウロの人生に衝撃を与えたこの出来事を通して、自分が握っていたユダヤ教の精通者としてキリストを迫害する立場でいたものから、キリストの啓示の光を受けて、キリストを伝える者となりました。神様がパウロにキリストを啓示することは主の喜びでありました。

パウロの信仰の望みは、Ⅱコリント 5:1-2 節で「たとえ私たちの地上の住まいである幕屋が壊れても、私たちには天に、神が下さる建物、人の手によらない永遠の住まいがあることを、私たちは知っています。私たちはこの幕屋にあってうめき、天から与えられる住まいを着たいと切望しています。」天からの住まいを着たいということでした。人手によらない永遠の住まいがあることを知っていて、私たちもそれを切望しています。そして、そうなるのにふさわしく整えてくださるのは、神であり、保障として御霊を与えてくださいました。だから、私たちは見えるものではなく、信仰に歩むのです。

ですから主は、18 節で「キリストによって私たちをご自分と和解させ、また、和解の務めを私たちに与えてくださいました。」そして、「私たちはキリストに代わる使節」だとも言っているのです。

パウロはⅡコリント 12 章 2~4 でも特別な啓示を受けています。「2 私はキリストにある一人の人を知っています。この人は十四年前に、第三の天にまで引き上げられました。肉体のままであったのか、私は知りません。肉体を離れてであったのか、それも知りません。神がご存じです。3 私はこのような人を知っています。肉体のままであったのか、肉体を離れてであったのか、私は知りません。神がご存じです。4 彼はパラダイスに引き上げられて、言い表すこともできない、人間が語ることを許されていないことばを聞きました。」

暗闇の真っ只中で、神の喜びなど知らずに、罪の中に生きていた私たちにも、パウロのように劇的ではありませんが、選びと召しがありました。それは、人生の大転換であり、闇の中に光が差し込んだのです。この光の中に光の子供として、

闇を照らす光として証しし続けるのです。

世界で起きていることは、理解し難いことであり、人間のあらゆる悪をしようとして、闇はますます世界を覆っています。

II コリント 4:6 で「**闇の中から光が輝き出よ**」と言われた神が、**キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせるために、私たちの心を照らしてください**」神の御力によって私たちの心は照らされ、神の栄光を知る知識である宝は、私たちの土の器に輝いているのです。私にはとてもできません、とか器ではありませんとか言わないでください。キリストの栄光の福音はあなたの内で輝いていて、キリストとともにキリストのみこころにゆだねた人にあらゆる営みの中で著されていくのです。

私たちは弱くて足りない知識のない者ですよ！でも主はそのような者を選び召したのです。

ですから私たちは、キリストがお建てになったこの教会で、互いに愛し合い、励まし合い、そして、主の教えを守り、交わりをし、パンを裂き、祈りましょう。神の栄光が現れ、御国が広がることを期待して働き、歩んでいきましょう。

ですから、私たちは「**勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい**。」とあるように、どんな時でも、御霊の火を燃え続けて、キリストに熱心に仕えましょう。5人の賢い乙女のは、油を切らさず、備えていました。花婿イエス様のそばにいつもいることが知らされます。いつも、イエス様との交わりが必要なのは言うまでもありません。暗闇に光を見いだすべく、光の子として遣わされ、イエス・キリストを証ししていきましょう。

今日のメッセージを簡単にまとめると、アベルのようにみこころに心を向け、正しいことを行い、パウロのように主のために労苦し、天からの住まいを切望し、キリストを着て、御霊の御力によって、弱い人を助け、励まし、互いに愛しあい、祈りあっていきましょう。